民俗風習

今昔にみる荒牧の「どんどん焼き」

石原巳代次

「どんど」とは、国語辞典で爆竹と云う。

お正月15日に行われる「どんど焼き」あるいは、地方によって呼び名は異なるが、「どんどん焼き」と称され、又、左義長ともいって、お正月の門松やシメ飾りなどを集めて焼き、悪魔払いをする行事で、地域によっては「道祖神」とも云っている。

民俗風習の一つとして、古き時代より伝承されてきたこの行事は、日中戦争から太平洋戦争にかけて、国民の戦意高揚に反するお祭り騒ぎの自粛ということから中断され、次第に衰退して、1時期全くその姿を消してしまった。

そして、戦後再び人心に平和をとり戻すなかで、「ふるさと」志向への見直しから各地で地域住民の伝承的行事の一つとして、再び活発化し、特に高度経済成長期の昭和30年代後半から昭和40年代にかけて顕著な動きとなった。

今昔の「どんどん焼き」行事は、ほぼ同様な趣旨のもとで実施されているが、そのやり方等は大分変った。

即ち、変ぼうしたというより改善されてきたと云った方が適当であるかも知れない。

つまり、近代社会に順応した生活文化の民俗として、新しく育まれてきたとも云える。

そこで、現在の荒牧町長老たちの話から、昔の「どんどん焼き」行事を想像すると、あらまし次のようなものとなる。

それは、昔、むかし、今から75年以上も前のこと、今の荒牧町が南橘村の一つの字で、50戸にも満たない小さな部落であったころ、お正月の15日には、部落あげて「道祖神」行事のどんどん焼きが子供主体で盛んに行われていたということである。

この日ばかりは、年季奉公に出ている者や遠くへ嫁に行ってる者まで暇をもらって帰郷したという賑やかで楽しい行事であった。

本番の15日の2～3日前から部落の子供たちが各戸の松飾りを集めて回り、部落の広場か田畑などに大きな松小屋を組み、青竹の先端に紙の幣束を付けておき、この小屋を寝城に合宿して当日に備えたのである。

もち論、子供たちは、学校から帰ってからの校外集団行動であった。

この小屋かけは、部落の若い衆（青年）が手伝って、松の枝や青竹、稲わらなど沢山使い盛り上げて作ったのである。

そして、15日の未明、大鼓を繰り出して打ち鳴しながら「道祖神が燃えるよう」とか「どんどん焼きがはじまるよう」などと叫びながら、子供たちの1団が部落の隅々までふれ回わると、人々は三三五五集ってきて、これに火を着けると、たちまち小屋は黒煙とともに火柱が立って燃え上がり、その火勢は遠くか

らでも空恐しいほどの有様であった。

火勢で青竹が倒れ、その先きに付いている幣束を取ると、その年の「おかいこ」（養蚕）が当たるという云い伝えがあって、みんな競って幣束を取り合ったものだという。

火はやがて燃え尽きて、その残った燠（おき）で餅やスルメなどを焼いて食べると、無病息災の御利益（やく）があるとか、書初めを火にくべると字が上手になるとか、又小屋の杭を取って帰り、家の屋根に投げると、火災予防になるとも云われた。

こうした賑やかで楽しい「どんどん焼き」行事が毎年お正月の15日に行われていた荒牧部落で、ある年のこと（年代は定かでないがおそらく明治の後半か大正の始めごろともいわれている）合宿していた１人の子供が、どうしたことか松小屋にまだ寝ていたのに気が付かず火を着けてしまった。

そして、燃え上がる火の中から子供を助けることができず、とうとう焼け死んでしまったという哀れで悲しい出来事が起きた。

一瞬にして無残にも暗い悲劇のドン底へ突き落されてしまった部落の衆は、大層悲しんで、それ以来ばったりと「どんどん焼き」の行事を止めてしまったというのである。

周辺の部落や村では、この事件後も盛んに「どんどん焼き」行事を続けていたが、荒牧部落の人々の間では「どんどん焼き」という言葉すら禁句とまでなってしまったというのである。

現在、荒牧町長老の養田真太郎氏が子供のころ（大正10年代）河原や総社地区の「どんどん焼き」の火の手の上がるのを見ているし、前橋市老人センターの裏側にあった森林（当時国有林地）のなかの広場（現大蔵屋団地）でも「どんどん焼き」を行った跡が残っていたのを目撃していると語っており、現在団地で実施している「どんどん焼き」行事もそれからずっと後年になって始ったものであるが、それと何らかの因縁があると思えるような不思議な今昔の荒牧「どんどん焼き」物語りとでも云えそうである。

荒牧町の一地区である団地の「どんどん焼き」行事の起こりと、その内容及び推移を紹介すると概ね次のようになる。

昭和55年、団地内の大蔵屋住宅地に住む有志、森富美男氏からの提言があり、時の団地自治会長丸山孝利氏によって取り上げられ、自治会主催として第１回を団地西側の田んぼで、昭和56年１月15日次代の滝沢富雄自治会長のもとで実施された。

そして、第２回は、昭和57年１月15日鈴木武雄会長によって開催され、第３回は、丸山孝利会長のもとで昭和58年１月15日実施された。

この年から団地内商店で組織されている商店会（会長星野久雄氏）の積極的な協賛を得て、この行事に一段と華やかさを添ることになり、第４回開催は、昭和59年１月15日石原巳代次自治会長によって盛大に行われた。

かくして、団地の「どんどん焼き」行事は、年毎に盛大となり、子供たちにとって楽しいお正月の行事となっている。

ただし、この行事は、昔の荒牧部落のものと異ってあくまで大人が主体で執り行うもので、子供たちは参観もしくは呼び子としての

ふれ回わりに加わるだけである。

行事は、お正月の15日早朝から各家庭で飾った松飾りやシメ飾り、古ダルマなど、あらかじめ自治会が借りておく団地西側の田んぼ（河原町住人所有地）に各自で搬入してもらって集め、自治会役員や組長をはじめ、各種団体の役員、有志たちが出て、小屋づくりをするが、その素材集めが大変でひと苦労するのである。

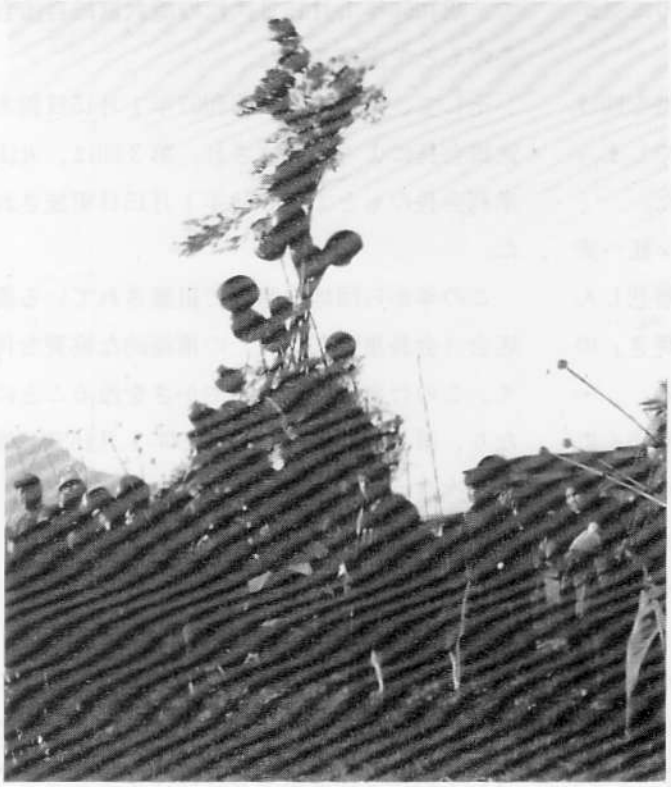
青竹は団地にないので、本村の有志や他地域の人々の温情にすがって提供していただき、その竹やぶへ行って伐採し運搬、そして、松の枝等は、団地内のあちこちで提供してもらい、大小２つの小屋を作るのである。

小屋の周囲には、団地以外からも集ってきた古ダルマが枝や棒に刺され、その赤色と松竹の濃緑が程よく調和して、くっきりと鮮やかに「とんがり帽子」のような形となって、着火を待つばかりとなる。

会場の隅には、商店会提供の心のこもった手づくりの「マエダマ」が赤城山で伐って来たミズの木の小枝に赤、白、青と枯れ木に花が咲いたように飾られ、そのもとでは、商店会自慢のおいしい甘酒が大きな釜にたっぷり用意されると、準備万端すべてが整いやがて子供たちの「ふれ回わり」が始まる。

「どんどん焼きが始まるよう」「火が着きますよう」などと大きな声で叫び回わると、あちこちから老若男女が集って来て、その中には人間の一生のうちで災難にあうといわれる厄年の人たちも混じり厄払いだと称して、ミカン箱を両腕にかかえながら午後４時の着火を合図に群集に向け、無造作に投げ続ける風情は何かしら荘厳ささえ感じさせるほどである。

完成した小屋組み（萩原徳一氏提供）



そのミカンを食べると、風邪をひかない、病気にかからないと云って、みな喜んで食べたり、家へ持ち帰る人もいるが、商店会からいただく「マエダマ」の串刺しや小枝を手に空を焦すかばかりの炎が下火になるのを待って一斉に差し出すころは、あたりも夕焼けに包まれ、赤々と燠が冴えて神秘的な盛儀は一段と盛り上がるのである。

主催者の要請によって、現場へ

消防自動車を出動させ、防火に警戒の目をゆるめない町の勇しい広域消防団の協力が一際（ひときわ）頼母しく感じさせるひと時でもある。

着火後、自治会が火にくべた「さつま芋」や「じゃが芋」のほどよい焼き加減は、思わず頬ばってしまうほどで、子供たちへの配分も忙しくみな競って手を出す有様である。

日が暮れて、やがて大々は思い思いに家路につくが、そのあとの火の始末は、自治会役員・組長有志の人々の役目で、夜遅くまで消火に努め、防火の安全を確認してから解散するのである。

そして、翌朝早く、再び役員が出て焼け跡の灰の中からクギや金物類を取り除き、肥料として田んぼに散布し、地主さんが田植えの時、怪我のないよう配慮するのも後始末の一つで、来年又、田んぼを借りるための重要な事柄となる。

この後始末が確実に出来て初めて団地の「どんどん焼き」行事のすべてがおわるわけである。

知らぬ者同志が寄り集って出来た新しい地域住民の心のふれあいの場、そして、親善親睦のよりどころとしても「どんどん焼き」の果たす役割は底知れないものがあると云っても決して過言ではないと云える。

そのことは、只単に昔の古い民俗風習の再現ということではなく、新しい時代を担う子供たちにとって楽しいお正月の行事であり、幼いころの「ふるさと」の思い出の一つとして、心豊かに育みつつ、いつまでも心の燈火として燃やし続けてほしいものであり、そして、団地住民にとっても、近代生活の中から芽生えた新しい集団社会の民俗風習として、その伝統的な行事を事情の許す限り、末永く伝承していってほしいものである。

燃え上がる小屋（湯浅重夫氏提供）

荒牧町と福祉

高　橋　喜　作

町制施行30年誌発刊に当り福祉のことについて少しのべて見たいと思います。

最近福祉と云う言葉をよく聞きますし、又書物にも書かれていますが、一口に云って福祉とは何か広い意味を持っていて具体的にどういうことが福祉なのか正確に答えられないような巾広い大きな問題ではないでしょうか。

昔から各地域で相互扶助の風習は各地で数多く見られましたが岡山県に制度として例を見ました済生顧問制度はその始めと云えましょう。群馬県に於ては伊勢崎町に大正12年12月1日方面委員制度が設けられました、次に大正13年9月に前橋市、高崎市、桐生市にそれぞれ設けられています、しかしこの制度は各自治体が実施機関として運営されていました救護法は現在の生活保護法の前身でありますが、昭和12年1月方面委員会が施行されて全国共通の具体的目標の基で活動化されました昭和20年8月大戦終結により日本の社会情勢は急変しました、その基本をなすものが憲法ではないでしょうか、第25条第2項に「国はすべての生活部面について社会福祉・社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない」と明記されています。旧法の下では対応出来なくなり数次の改正により現在の生活保護法、身体障害者・老人・母子寡婦・児童・精神薄弱者の各福祉法等を中心とする法令に基き国の責任に於て福祉が推進されているわけです。

方面委員から民生委員に名称が変ったのが昭和23年7月29日からです。この時代から民生委員は「社会福祉の増進に努める」の基本理念が確立して福祉の末端の担い手として活動がなされてきました。私達の町荒牧も昭和40年代に入って、団地や群馬大学周辺の発展は急速に進みました。43年頃より婦人民生委員が各地で委嘱されてきました、婦人の地位向上、婦人問題に対する理解等社会的必然の結果といえるでしょう。昭和47年荒牧小学校開校を前後して世帯の増加は上昇を続けてきました従って民生、児童委員も増員されて昭和49年12月3名52年12月4名58年12月には男3名女3名と地区内一番の世帯を持つ町となりました。この大発展をした荒牧町の福祉に貢献された先輩を偲びつつ、参考までに現在までの氏名を記して見ましょう。

故人	方面委員	関口秀吉
〃	〃	養田保太郎
〃	民生委員	鯨井好一
〃	〃	今井恒雄
退任	〃	養田真太郎
〃	〃	高橋常治
〃	〃	山本繁
現在	〃	都丸静江
〃	〃	高橋喜作
〃	〃	小池国男
〃	〃	山田光一
〃	〃	古谷あや子
〃	〃	佐藤はじめ

母子保健について

次代を担う子供を健やかに育てる事は母子が身心共に健全でなければなりません。これらのことを相談し、お手伝いする方々が母子保健推進員であります。この方々のご苦労も大変でありますが、これからの益々のご活躍を期待しています、都丸静江、高橋とみ子、高橋セツ、関口サト、関口みつゑ、湯浅須賀子、古谷あや子、の各位です。

青少年健全育成について

最近青少年の非行が問題になっていますが、この問題に取り組んでいる補導推進員がおります近頃は青少年の問題化が低年齢化したために関係小学校並び関係機関と連絡を保ちつつ日夜補導推進活動を行っていて次代を担う青少年が精神身体共に健全に育つことを願って活躍しております。全くご苦労様です。現在の町内補導推進員は古谷一雄、小池国男、養田修三さんです。

荒牧町老人福祉推進協議会について

町内総ての住民が老人のための明るい町をつくるために社会共同の責任で連帯意識を持って心と心のふれ合いのもと老人のための各種事業を総合的に行なうことによって

(1)老人をいたわり大切にし

(2)老人の能力をいかし、生きがいを高め

(3)老人の孤独感をなくし、町民との交流をふかめ明るい老後の生活を送ることが出来る町づくりを行ない、老人福祉の推進に寄与する

目的で自治会長を中心として各団体及び民生委員等によって組織されています、私達の先輩であります、老人は人生経験豊かで社会生活が長いため何かしら豊富な経験知識を持っています。これらのことを後世に伝える役割があると思います。このことは、すなわち歴史を造る作者であり社会の宝ではないだろうか、ことに町内高齢者教室は市内最高の成果をあげていて常に年間を通じて学習しています、今云われている生涯教育を実践している、すぐれている例といえましょう、永く続けたいものです。町内の高齢者、ひとりくらし、ねたきりの方々の友愛訪問、町内運動会への高齢者招待等はこの協議会にもとづいて推進されています。とにかくお年寄りは社会の宝ですから。やがて私達も好むと好まざるとにかかわらずこういう時が来ることです。

○昭和58年１月現在の各種調査を参考まで、

生活保護	母子家庭	父子家庭	ねたきり	障害者(重)	障害児童	ひとりくらし	痴呆性
男 女			男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
4 10	37	10	5 6	4 4	3 1	1 10	2 1

紙面の関係で詳しく申し上げられませんが、ほんの一部分にすぎませんでしたが、以上のように各関係機関が連絡を密にして老若男女共に社会連帯意識のもと明るく住みよい町造りに努力しているわけです、私達の町も59年を境に大きく変りつつあります。産業化の進展と都市化の変拡による生活の変化であります。

よく云われている言葉に文化と福祉は社会の両輪と云われています。きめ細い福祉が要求されるでありましょう。これからの福祉の方向を考える時に明日の荒牧町の発展は福祉の向上と共に歩むでありましょう。

婦人会主催指圧教室

荒牧町姓別一覧表

No	姓	軒数
1	高橋	37
2	小池	33
3	関口	29
4	佐藤	19
5	宮下	16
6	都丸	15
6	養田	15
7	萩原	13
7	小林	13
7	鈴木	13
8	渡辺	12
9	金子	11
10	山田	10
11	角田	9
11	田中	9
11	吉田	9
11	斉藤	9